

「父の匂い」

—2 稿—

2026/9/15

〈人物表〉

本間 樹子 ほんま きこ

(18)

高校三年生

本間 洋司 ほんま ようじ

(42)

樹子の父

本間 圭子 ほんま けいこ

(38)

樹子の母

喜美子 きみこ

(42)

スナック「魔女の卵」のママ

1. 本間家・外観（早朝）

平屋建ての古びた一軒家。

朝ぼらけの中、鳥が鳴いている。

トイレを流す音。

2. 本間家・廊下（早朝）

本間樹子（18）、寝ぼけ眼を擦りトイレから出る。

部屋に戻ろうとして、ふと立ち止まる。

帰ってきたばかりの父・本間洋司（42）と鉢合わせ。

せ。工場の作業服姿。

洋司、あっと驚いていて、

洋司 「……ただいま」

樹子 「おかえりー」

と、あくびを噛む。

洋司 「朝まで受験勉強？」

樹子 「うん」

洋司 「頑張ってるなあ」

樹子 「だって、私立行くことになったら気まずいじゃん」

と、冗談めかす。

洋司 「はは、それはそうだな」

洋司、樹子の頭にポンッと手を置いて、すれ違う。

樹子、ハッと何か気づいた顔。

樹子M「香水の——」

3. 本間家・浴室（早朝）

洋司、シャワーで頭を洗っている。

樹子M「匂いがした」

4. 本間家・脱衣所（早朝）

シャワーの音。

樹子、戸の隙間から脱衣所を覗いている。

洗濯機が回っている。

5. 本間家・リビング（昼）

樹子、母・本間圭子（38）とテレビを見ている。
ベタな昼ドラ。若い男女、ベッドに腰掛けている。

ドラマの女「奥さん、いるんですよ？」

男、女の手を握って、

ドラマの男「俺には、君しか見えないんだッ！」

二人、組んず解れつの様相へ。

圭子、冷めた目でお煎餅をバリバリしつつ、

圭子 「やーね、不倫って」

と、チャンネルを変える。

圭子 「ああいうの流してっから、男が調子に乗んでしょが」

樹子、傍で見えていて、

樹子 「あのさ」

圭子 「んー？」

樹子 「お父さん、ってさ」

圭子、視線はテレビに向けたまま。

圭子 「……うん」

樹子 「今何の仕事してんだっけ？」

圭子 「工場の夜勤」

樹子 「……ふーん」

圭子 「知り合いづてに精密機械の部品工場の社長？紹介しても
らったんだって。言ったよね？」

樹子 「……うん」

圭子 「何、大学のお金なら大丈夫だよ？」

樹子 「いや、そうじゃなくて、気になっただけ」

圭子 「……楽しくやってるみたいだよ」

6. 本間家・洋司の部屋（昼）

洋司、布団で静かにイビキをかいて寝ている。

圭子の声 「若い人多い職場だから、刺激もらってるって」

樹子の声 「……へーえ」

7. 本間家・樹子の部屋（夜）

樹子、机で勉強をするも、どこか集中できない。

何やら物音が聞こえる。

8. 本間家・玄関（夜）

作業服姿の洋司、家を出る。

樹子、こっそり後ろで見ている。

9. 住宅街（夜）

洋司、スタスタと大腿で歩く。

少し離れて、後ろには樹子。

野球帽を目深に被り、なんとか着いていく。

10. 電車（夜）

洋司、席で鞆をガサゴソしている。

樹子、離れた席で見ている。

洋司の手元、コスメブランドの小さな紙袋。

樹子、あつという顔。

11. ターミナル駅・構内（夜）

雑踏の中、少し浮いている工場服姿の洋司。

樹子、人混みに揉まれキョロキョロ辺りを見回す。

必死に背伸び。なんとか洋司の背中を発見。

12. 歓楽街（夜）

ネオンの光溢れる歓楽街。

樹子、完全に見失い、迷っている。

と、誰かぶつかる。落ちる野球帽。

ガラの悪そうな若い男。

若い男「いってーな、どこ見て歩いてんだよ！」

樹子「……すみません！」

と、平身低頭。

男、樹子をじっと見て、急に態度を和らげ、

若い男「……お詫びにさ、遊んでくれない？」

樹子「え？」

若い男「結構可愛いじゃん。名前なんてーの」

男、樹子の肩に手をかける。

樹子 「あの……」

若い男 「いいじゃんちょっとくらい」

樹子、男と押し問答。困る。

と、通りに面したスナックのドアが開く。

中からロングスカートの大柄な女性？が出てくる。

セミロングの金髪だが、顔はよく見えない。

ふと押し問答の様子が目に入り、

女？ 「……やめなよ」

と、聞こえるのは男性の声。

若い男 「あ？」

女？ 「嫌がつてんじゃん」

と、男の手を掴む。

女？、男の腕をグッと曲げる。あらぬ角度。

樹子、驚く。

若い男 「いてててて……！」

周囲の視線が集まる。

若い男 「折れる……！ マジ折れるって！ んだよコイツ！」

女？ 「ダサいことしてんの、分かんない？」

若い男 「分かった、分かったって……！」

腕を解かれ、男、舌打ち。立ち去る。

女？ 「……大丈夫？」

と、野球帽を拾い樹子の頭に載せる。柔らかな笑顔。

二人、顔を合わせる。

女、よく見れば女装した洋司である。

樹子、訳がわからず、動転。

樹子M 「あの匂いだ」

対する洋司、樹子を見てあっと口を開ける。

洋司、ダツと逃げるように店へと消える。

店の看板。「スナック魔女の卵」の字。

樹子、恐る恐る、店を覗いてみる。

喜美子の声 「あら、可愛いお客さん」

振り返るとスナックのママ・喜美子（42）。

同じく女装した男性。手にはスーパールの袋。

樹子 「あ、すいません」
喜美子 「……ゆっくりしてく？」

13.

スナック「魔女の卵」・店内

グラスに入ったオレンジジュース。

樹子、一人バーカウンターに座る。落ち着かない。

店には女装キャストと客がちらほら。

奥のテーブルで洋司、中年の男性客と談笑。

洋司、お酌をしている。

樹子、野球帽を被りつつ、洋司の方が気になる。

喜美子 「こんばんは、ママの喜美子です」

と、カウンターの喜美子、名刺を渡す。

喜美子、受け取って、

樹子 「あ、どうも」

喜美子 「雅美（まさみ）ちゃんのお友達？」

と、洋司の方を指す。

樹子 「ま、まさみ、ちゃん？」

喜美子 「あの子、人たらしつたらないわよね」

樹子 「そ、そうなん、ですね」

ふと、喜美子の格好をジロジロと見る。

喜美子、見透かしたように笑い、

喜美子 「私はただの女装家」

樹子 「え？」

喜美子 「好きで女装してるだけで、普段は男ってこと」

樹子 「そう、なんですね」

喜美子 「みんながどうかは知らないけど」

樹子 「え？」

喜美子 「ここに女になりに来てるって以上は、私も知らない」

洋司、客と楽しげに談笑。

喜美子 「他に気になることは？」

樹子 「……あの、それじゃあ」

樹子、思い切って、

樹子 「仮に、仮にですけど、自分の家族が内緒でそういうことをしてるのを知ってしまったとして」

喜美子「……うん」

樹子「その時、私はどうすればいいんでしょうか？」

喜美子「……うーん」

喜美子、考えて、

喜美子「どうだろ？」

と、テヘッと笑う。

樹子、拍子抜け。

喜美子「まあいづれ分かるよね。私も実家でブラ洗濯してバレた」

樹子「……ブラ」

喜美子「着けるほどないだろって？」

樹子「いえいえいえいえ」

と、懸命に否定。

喜美子「私はバレて助かったかな。隠したいってより、言い出せないって感じだったから」

樹子「へーえ」

喜美子「知らないよ。何が正解かなんてさ」

樹子「……うーん」

喜美子、吹き出して、

喜美子「そんな悩まないの。こっちはこっちで楽しくやってる」

樹子「え？」

フロアから大きな笑い声。

洋司「ちよっと！　なんでパンツで熱爛温めてんのよー！」

見ると、洋司の席の客、出来上がっている。

洋司「あー、おっかしー！」

洋司も腹を抱えて笑っている。

樹子、楽しそうに笑う洋司に呆気に取られる。

喜美子「ちよっとー。女の子来てるんだから、下ネタ禁止！」

と、声を飛ばす。

洋司、カウンターを見る。

樹子、一瞬、目が合う。

洋司「ママ、ウチらだって女の子！」

どっと湧く。

樹子、呆気に取られるが、ややあって、笑う。

喜美子「雅美ちゃんもうすぐ空くけど。話したいでしょ？」

樹子 「……ここで、大丈夫です」

と、席を立つ。

喜美子 「そう？　ウチは可愛い子はタダだよ？」

樹子 「あの、少なくとも、今日のところは」

喜美子 「そっか」

と、微笑む。

樹子 「ありがとうございました」

14. 本間家・外観（早朝）

トイレを流す音。

15. 本間家・廊下（早朝）

樹子、寝ぼけ眼でトイレから出て、立ち止まる。
帰ってきた洋司と鉢合わせ。

樹子 「……おかえり」

樹子M 「香水の、匂い」

洋司 「……ただいま」

洋司、すれ違いざまに樹子の頭に手を置く。

樹子、微笑む。

樹子M 「お父さんの、匂い」

（おわり）